

身体的, 言語的, 関係性いじめに関する因子構造

—大学生を対象に回顧法を用いて—¹⁾

The factorial structure of physical, verbal and relational forms of bullying: conducting retrospective investigation with university students

水谷 聡秀²⁾

Satohide MIZUTANI

雨宮 俊彦³⁾

Toshihiko AMEMIYA

Abstract

In this study we explored the factorial structures of bullying experiences by using the retrospective scales of victimization and perpetration of bullying experiences. We asked 480 Japanese university students to complete a questionnaire on subjective frequency of victimization and perpetration of bullying experiences in junior high school. One factor model, two factors models (direct/indirect forms of bullying or physical/mental forms of bullying), three factors model (physical, verbal, and relational forms of bullying) were tested using confirmatory factor analysis with ordinal data. Both for victimization and perpetration of bullying, three factor models were adopted, because there were almost no differences in the fit indices among models. Sex differences were also found in victimization and bullying. As for the correlations among each of the forms, it was discussed how these correlations might vary with culture, methodology and other factors.

Keywords: victimization, bullying, categorical factor analysis

問題

本研究では, いじめ問題に寄与するため, 主にいじめの形態の因子構造について構成概念妥当性の確認を踏まえて検討する。研究を進めるに当たって, 本研究でのいじめの定義を示す。文部科学省 (2017) は「児童生徒に対して, 当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為 (インターネットを通じて行われるものも含む。) であって, 当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」をいじめだと定義している。これは現在のいじめ防止対策推進法の定義とほぼ同じである。本邦のいじめ研究ではこの定義が取り上げられ, コミュニケーションをとる場面にはいじめのリスクが潜んでいることについて議論が行われている (望月他, 2020)。そのため, 文部科学省 (2017) の定義は本邦でのいじめ研究にも沿うものであるため, 本研究でもこの定義を用いる。

いじめ形態に関する先行研究を概観するとき, いじめと攻撃の両研究も踏まえる。なぜなら, いじめの類似概念として学級などの集団内の攻撃があり,

この種の研究も踏まえて論じると生産的だと考えられるからである。

形態の分類

いじめ研究では, いじめ形態に関する分類がいくつかある。森田・清永 (1986) は, 一方的に殴るや金品を奪うなどの物理的いじめと, 仲間外れや悪口などの心理的いじめに分類している。Olweus (1993 松井・角山・都築訳 1995) は, 比較的あからさまな攻撃的特徴を持つ直接的いじめ (direct bullying) と, 遠回しな攻撃的特徴を持つ間接的いじめ (indirect bullying) に分類している。

Olweus (1993 松井・角山・都築訳 1995) の分類は, いじめ研究と深く関わりのある攻撃研究における直接的攻撃 (direct aggression) と間接的攻撃 (indirect aggression) の分類 (Card, Stucky, Sawalani, & Little, 2008) に対応する。直接的攻撃には, 叩くや蹴るなどの身体・物理的攻撃 (physical aggression) と悪口を言うなどの言語的攻撃 (verbal aggression) がある (Card et al., 2008)。また, 間接的攻撃に関しては, 関係性攻撃 (relational aggression) や社会的攻撃 (social aggression) といっ

1 本研究の一部は日本グループ・ダイナミックス学会第65回大会にて報告された。

2 本学大学院文学研究科心理臨床学専攻非常勤講師

3 関西大学社会学部特任教授

た類似した概念がある。これらの類似した3つの概念は、強調している側面や、研究者による概念化の仕方異なるが、直接的攻撃との対比で言えば、どの概念においても関係操作的でたいていあからさまではない方法が使われる (Archer & Coyne, 2005)。

以上の先行研究のようにいじめ形態を2つに分類する研究があることに対して、言語的いじめの分類の仕方を変えて3つに分類する研究もある。いじめ形態が2つに分類される場合には、悪口などの言語的いじめは、直接的、間接的いじめの分類では直接的いじめに、物理的、心理的いじめの分類では心理的いじめに分類される。これらに対して、言語的いじめが直接的いじめや心理的いじめに分類されずに、身体的、言語的、関係性に分類されることもある (Ando, Asakura, & Simons-Morton, 2005)。言語的いじめをどのように分類するかによって、いじめ形態の分類が異なると言えよう。

形態の因子構造と課題

構成概念妥当性の観点から、いじめ形態に関して適切な因子構造を検討する必要がある。直接的いじめ (攻撃) と間接的いじめ (攻撃) の因子が抽出された研究には、Lagerspetz, Björkqvist, & Peltonen (1988), Björkqvist, Lagerspetz, & Kaukiainen (1992), Crick & Grotpeter (1995), 黒川 (2010a, 2010b)⁴⁾ がある。物理的いじめと心理的いじめの因子が抽出された研究には、本間 (2003), 荒木 (2005) がある。身体的いじめ (攻撃), 言語的いじめ (攻撃), 関係性いじめ (攻撃) の因子が抽出された, あるいは確認された研究には, Ando et al. (2005), 高橋・佐藤・野口・永作・嶋田 (2009), Betts, Houston, & Steer (2015) がある。ただし, Betts et al. (2015) は所有物に関するいじめとネットいじめ因子も確認されている。このように, いじめ形態に関する各分類に対応した因子が抽出される, あるいは確認されている。しかし, 有用な因子構造はいずれであるかという課題が残っている。

とくに, 言語的いじめの位置づけが因子分析によっても異なる。この課題を検討するためには, 検証的因子分析を通して直接的/間接的の2因子モデル, 物理的/心理的の2因子モデル, 身体的/言語的/関係性の3因子モデルの適合度を比較するとよ

い。このとき, 2因子モデルよりも, 3因子モデルでは細分化されているため, 項目を用意するには3因子モデルに基づくといえよう。

また, 回顧法ではいじめ形態の因子構造を示した研究は少ない。以上で取り上げたいじめ形態の因子構造を示した先行研究のうち, 荒木 (2005) のみが回顧法を用いた研究である。いじめ研究では回顧法を用いた過去のいじめによる大学生, あるいは成人への長期的影響の研究について一定の蓄積があるが (荒木, 2005; 坂西, 1995; Boulton, 2013; 水谷・雨宮, 2015; Schäfer et al., 2004), 因子構造が示された尺度を使用すると, いじめ形態に関するさらに精練された知見が得られるであろう。

ネットいじめの位置づけ

対面上で経験する従来型いじめだけでなく, ネット上 (サイバー上) で経験するネットいじめもある (Olweus, 2012; 内海, 2010)。たとえば, 悪口や仲間はずれなどの言語的いじめや関係性いじめは, 対面, メール, SNS, アバターが使用される仮想空間などで存在している。叩くなどの身体的いじめは, 対面上で経験するだけでなく, 仮想空間でアバターを使用した場合にはネット上でも存在する⁵⁾。

調査の際には, いじめ経験が対面, あるいはネット上なのか問題となる。対面かネット上について教示を与えなかったときに, とくに21世紀に入ってからネット上も含まれている可能性がある。調査協力者に明確に判断してもらうためには, 対面とネット上の両面を含めて教示に明示する方法もあろう。もしくは, 対面かネット上といった区分を行い, 研究によってはICTツールを特定して, 媒体による相違を検討するとよいだろう。

ネットいじめの尺度開発では, 種々のICTツールがいじめ項目に付加されている (Betts et al., 2015; Cañas, Estévez, Martínez-Monteagudo, & Delgado, 2020; 黒川, 2010a, 2010b; Mehari & Farrell, 2018)。なかでも, Mehari & Farrell (2018) はICTツールを付加したネットいじめの項目も設けているが, 従来から使用されていたいじめの項目には, 対面上とネット上の両面を含んでいるとしている。彼らは調査協力者にとってどちらでのいじめか区別し難いと推察しているためである。

4 黒川 (2010a, 2010b) では, 悪口が間接的いじめ因子に, おどしが直接的いじめ因子に負荷するため, 言語的いじめの位置づけは不安定である可能性がある。

5 とくに, ユーザがVRゴーグルやグローブなどを身に付けた場合には, ユーザは臨場感を持つであろう。

そこで、以上で挙げたいじめ形態の最適なモデルを検討する際には、ICTツールを特定せず、対面かネット上の区分をせず、大枠からいじめの経験を尋ねるとよいだろう。その後、従来からの項目で対面とネット上のいじめの区別が可能かも含めて、詳細な研究を進めるとよいと考えられる。

いじめ被害と加害に関する相関、性差

いじめ被害といじめ加害との間には相関がある(Ando et al., 2005; Betts et al., 2015)。被害と加害に相関がある理由としては2つ考えられる。一つは、攻撃やいじめに関する他者との相互作用である。具体的には、報復や八つ当たりなどである。もう一つは、調査協力者が単に攻撃性が高い集団にいたか低い集団にいたかである。これらによって、いじめ被害と加害のどちらか一方だけ経験するというよりも、どちらも経験しない場合か、両方を経験する場合が比較的が多いと考えられる。

いじめ経験や攻撃研究では性差が報告されている。海外のメタ分析では、直接的攻撃では男性が多く、間接的攻撃では女性が多いか性差は見られない(Card et al., 2008)。国立教育政策研究所(2016)のデータからは、身体的いじめ被害に相当する項目に関しては女子より男子がよく経験していることに対して、関係性いじめ被害に相当する項目に関しては男子より女子が多い年月もあったが、あまり変わらない年月もあることが示されている。

研究の目的

以上から、本研究では第1に課題が残っている回顧法でのいじめ形態の因子構造について構成概念妥当性の確認を踏まえて把握する。その際、直接的/間接的2因子モデル、物理的/心理的2因子モデル、身体的/言語的/関係性3因子モデルのいずれが因子的妥当性を伴うかを検討する。この検討のときには、先述した理由から3因子モデルで尺度設計を行う。第2にさらなる構成概念妥当性の確認のために、被害と加害との相関、性差を検討する。なお、今後も大学生を対象として回顧法を用いた長期的影響が検討できるように、小中高時代の時期においていじめの認知率が比較的高く(文部科学省, 2012, 2017)、大学生にとって遠くもなく近くでもない過去に相当す

る中学生のいじめ経験を扱う。

測定論的な特徴として、いじめ経験の各変数の分布の偏りがある。各項目においていじめ経験の頻度は低いことが多く、高いことは少ない(Ando et al., 2005)。そのため、質的因子分析を行う。

方法

調査協力者

調査協力者は関西圏の大学生480名(男性197名、女性283名)であった。データに欠損値のある者37名を除いて⁶⁾、分析対象者を443名(男性175名、女性268名)とした。分析対象者の年齢は $M = 19.42$, $SD = 1.09$ であった。分析対象者のうち中学生のとき日本の学校に所属していたと回答した者は429名であり、海外の学校は4名、日本と海外の両方は2名、無記入は8名であった。所属していた中学校に関しては、国立と回答した者は6名、私立69名、公立360名、無記入8名であった。

使用尺度

いじめ被害の尺度 中学生の頃のいじめ被害の経験の主観的な頻度を測定するために回顧法を用いた。後述する選定方法でいじめ項目を選び、19項目を作成した(付録参照)。このとき、定義に合わせて「苦痛をうけた」を項目ごとに付加した。付加しなければ、荒っぽい遊びの場合の「たたく」や「からかい」といった経験も含めて、調査協力者は経験があると回答することもあり、いじめ以外の行動を含んでしまうであろう。選択肢は「6:とてもよくあった」、「5:よくあった」、「4:ときどきあった」、「3:たまにあった」、「2:あまりなかった」、「1:ほとんどなかった」、「0:まったくなかった」の7件法であった。

また、本調査では、いじめの定義に関わる、特定の関係のなかでの行為に制限した。また、「ネットいじめの位置づけ」で述べた理由から、対面、ネット上の両面を含めて尋ねることにした。以上の点をふまえ、項目群の冒頭には「中学生の頃、あなたがいた学校や、部活動などで関わりのある学校の児童や生徒から、下の項目にあることをされて苦痛をうけたのはどれくらいあったか答えてください。何かされ

6 データに欠損値のある者のなかには、調査票を返却したものの途中で辞退している、あるいはページごと見落としていると判断できる調査協力者もいた。後述するいじめ被害と加害の両方の全項目に回答していない者は7名、加害について回答しても被害の全項目に回答していない者は1名、被害について回答しても加害の全項目に回答していない者は1名であった。

た場所や場面は学校のなかや学校のそとで、顔を合わせる場面、インターネット、メール、携帯電話などをふくみます」といった教示文を提示した。

いじめ加害の尺度 いじめ加害の経験の主観的な頻度を測定するために、いじめ被害の項目に対応させるように19項目を作成した(付録参照)。いじめ被害と同様の理由で、各項目に「苦痛をあたえた」を付け加えた。選択肢は被害と同じであった。教示文についても、いじめ被害と同様の理由で、項目群の冒頭には被害と同様の教示文を提示した。このとき、教示文の「児童や生徒から・・・されて苦痛をうけた」を加害では「児童や生徒に・・・して苦痛をあたえた」へ、「何かされた場所」を「何かした場所」へ文言を変えた。

いじめ項目の選定 いじめ項目を選定するとき、因子構造が示されている論文(荒木, 2005; Betts et al., 2015; Björkqvist et al., 1992; Crick & Grotpeter, 1995; 本間, 2003; Lagerspetz et al., 1988; 高橋他, 2009)と日本全国で使用されるいじめ項目が掲載された資料(文部科学省, 2012)、国際的に使用されるOlweusのいじめ経験質問紙の項目が掲載された論文(Solberg & Olweus, 2003)、本邦で引用件数が51件ある(2022年2月25日時点でGoogle scholarによる)いじめ調査項目が掲載された論文(岡安・高山, 2000)を参考にした。このとき、偏りなく測定できるよう類似した内容を分類し、身体的、言語的、関係性

の各領域の構成概念に当てはまる内容のうち、よく用いられる内容から選定した。構成概念をさらに偏りなく測定するために、身体的な痛みを伴う「つねる」を、相手に向かって蔑む韻律情報を含むパラ言語として「口調」を、他者との関係性を悪化しかねない「曝す」を独自に追加した。また、3種類の領域以外のいじめ経験も測定できるよう、「その他」を含めた。

手続き

調査票AとBの2種類を作成した。調査票Aでは、いじめ被害と加害という順に、Bでは加害と被害という順に並べた。あらかじめ調査票AとBをシャッフルした束を用意したあと、調査実施の際には調査票を任意に配布した。分析対象者のうち調査票Aに回答した者は213名、Bは230名であった。

2017年12月と2018年1月に、関西圏にある大学に所属する学生に対して、心理学関連の講義において調査参加への協力を依頼し、調査を集団で実施した。このとき、次の点を学生に伝えた。1) 氏名や学籍番号を記入しない形式で調査を行い、プライバシーに配慮している。2) 調査への参加は任意で、途中で辞退できる。3) 調査参加の協力を同意する者は調査票を返却する。なお、筆者らが所属する機関の研究・教育倫理委員会で本研究の承認を得ている⁷⁾。

表1 いじめ被害と加害の記述統計量

いじめ被害					いじめ加害				
項目	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度	項目	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度
v01. 口調	2.54	1.67	0.06	-0.90	b01. 口調	2.14	1.59	0.21	-1.02
v02. 無視	1.93	1.70	0.50	-0.83	b02. 無視	1.87	1.58	0.36	-0.97
v03. 曝す	1.87	1.63	0.53	-0.72	b03. 曝す	1.34	1.40	0.94	0.18
v04. 蹴る	0.97	1.38	1.43	1.31	b04. 蹴る	0.91	1.41	1.57	1.65
v05. あだ名	1.65	1.80	0.80	-0.51	b05. あだ名	1.42	1.55	0.81	-0.42
v06. 押す	0.99	1.41	1.46	1.44	b06. 押す	0.90	1.31	1.58	2.04
v07. 悪口	1.67	1.69	0.71	-0.59	b07. 悪口	1.43	1.58	0.91	-0.12
v08. 殴る	0.84	1.34	1.69	2.29	b08. 殴る	0.78	1.31	1.73	2.22
v09. 脅す	1.17	1.51	1.19	0.56	b09. 脅す	1.03	1.45	1.46	1.36
v10. 噂	1.52	1.72	0.91	-0.24	b10. 噂	0.93	1.31	1.57	2.12
v11. つねる	0.72	1.20	1.84	2.98	b11. つねる	0.62	1.12	1.97	3.54
v12. 侮辱	1.11	1.54	1.35	0.94	b12. 侮辱	1.10	1.52	1.31	0.79
v13. 仲間外れ	1.77	1.79	0.66	-0.72	b13. 仲間外れ	1.42	1.54	0.79	-0.46
v14. 当てる	0.75	1.23	1.88	3.41	b14. 当てる	0.67	1.15	1.91	3.42
v15. 仲を裂く	1.18	1.54	1.18	0.35	b15. 仲を裂く	0.75	1.26	1.91	3.31
v16. からかい	2.14	1.81	0.34	-1.03	b16. からかい	1.81	1.70	0.55	-0.76
v17. 叩く	0.83	1.34	1.82	2.94	b17. 叩く	0.82	1.29	1.62	1.95
v18. 陰口	1.98	1.88	0.56	-0.90	b18. 陰口	1.89	1.63	0.41	-0.82
v19. その他	1.93	1.81	0.52	-0.89	b19. その他	1.55	1.55	0.65	-0.63

結果

項目の記述統計量

基礎的な統計量を示すために、いじめ被害と加害の記述統計量を算出した(表1)。全般的に歪度が高かった。

因子分析

いじめ被害と加害で検証的カテゴリカル因子分析を行った。検証するモデルは、いじめ形態を分類しない被害と加害の各1因子モデル、形態を分類した直接的/間接的2因子モデル、物理的/心理的2因子モデル、身体的/言語的/関係性3因子モデルであった(図1)。いじめ経験の被害に関する異なる形態間の相関と加害に関する異なる形態間の相関、被害と加害との間の相関が存在することが予想される。そこで、2種類の2因子モデルと1種類の3因子モデルではいじめ被害内、加害内のすべての因子間、被害と加害間のすべての因子間に相関を想定した。各1因子モデルでは被害1因子と加害1因子との間に相関を想定した。3因子モデルでは、各潜在変数からパスが引かれる観測変数は6つであった。また、直接的/間接的2因子モデルでは、直接的いじめの潜在変数から身体的いじめに関わる6項目と言語的いじめに関わる6項目へパスを引いた。間接的いじめの潜在変数からは関係性いじめに関わる6項目へパスを引いた。物理的/心理的2因子モデルでは、心理的いじめの潜在変数から言語的いじめに関わる6項目と関係性いじめに関わる6項目へパスを引いた。物理的いじめの潜在変数からは身体的いじめに関わる6項目へパスを引いた。いじめ被害と加害ともにその他のいじめを含めなかったため、それぞれの尺度で使用した項目は18項目であった。さらに、男性を0、女性を1とした女性ダミー変数を利用して、どのモデルにおいてもすべての潜在変数について性別を統制した。性差が想定される場合には、性別を統制しないと、推定値やモデルの適合に問題が生じるからである(狩野, 2002)。

Rのパッケージlavaan 0.6.10でcfa関数を用いて、上述した3種類のモデルにおいて、WLSMV (Weighted Least Squares Means and Variance adjusted) 法でパス値を推定した。通常、各項目は間隔尺度として見なされて因子分析が行われるが、こ

こでは順序尺度としてカテゴリカル因子分析を行った。その結果、適合度は表2の通りであった。ここで、CFIに対応してモデルの儉約度が考慮できる指標にPCFIがあり(星野・岡田・前田, 2005)、最尤法を利用していないため算出できなかったAICやBICの代わりにこの指標を示した。最も適合度が高いのは3因子モデルであるが、儉約度を考慮した場合には、どのモデルも同じ程度であった。検討したすべてのモデルにおいてPCFIは明らかな差があるわけではないので、どれを採用しても良いであろう。いじめ形態の因子構造に関しては、先行研究で示されている複数のモデルから検討できる。ただし、言語的いじめを分離させずにどちらか一方の2因子モデルを採用した場合には、2種類の2因子モデルのどちらか一方でしか解釈できず、他方のモデルに依拠した先行研究との整合性を検討できない。これに対して、分離させると、研究者が言語的いじめを身体的いじめと関係性いじめのどちらかに分類できるので、双方の2因子モデルに依拠した先行研究との整合性を検討できる。室橋(2014)は適合度に明らかに差がない場合には実質科学的な側面を優先することを薦めていることから、本研究では言語的いじめを心理的いじめと直接的いじめから分離させた3因子モデルを採用する。なお、表3に推定値を示した。

測定モデルにおける標準化推定値は.76以上であった(表3の被害と加害の潜在変数から観測変数へのパス参照)。いじめ被害内、いじめ加害内、いじめ被害と加害間におけるすべての因子間に正の相関が示された(潜在変数間の双方向パス参照)。また、性別を統制したため、各潜在変数の性差も把握できる。身体的、言語的いじめ被害、すべてのいじめ加害において、女性よりも男性でいじめ経験の頻度が高かった(女性ダミー変数から潜在変数へのパス参照)。

尺度の記述統計量と内的整合性

いじめ経験の下位尺度得点を求めるために、尺度内の項目の平均値を算出した。各尺度得点の記述統計量を男女別も含めて表4に示した。内的整合性の信頼性を見るため、各尺度の α 係数を求めた。いじめ被害では身体的は.95、言語的は.89、関係性は.89、いじめ加害では身体的は.95、言語的は.91、関係性は.89であり、信頼性は高かった。

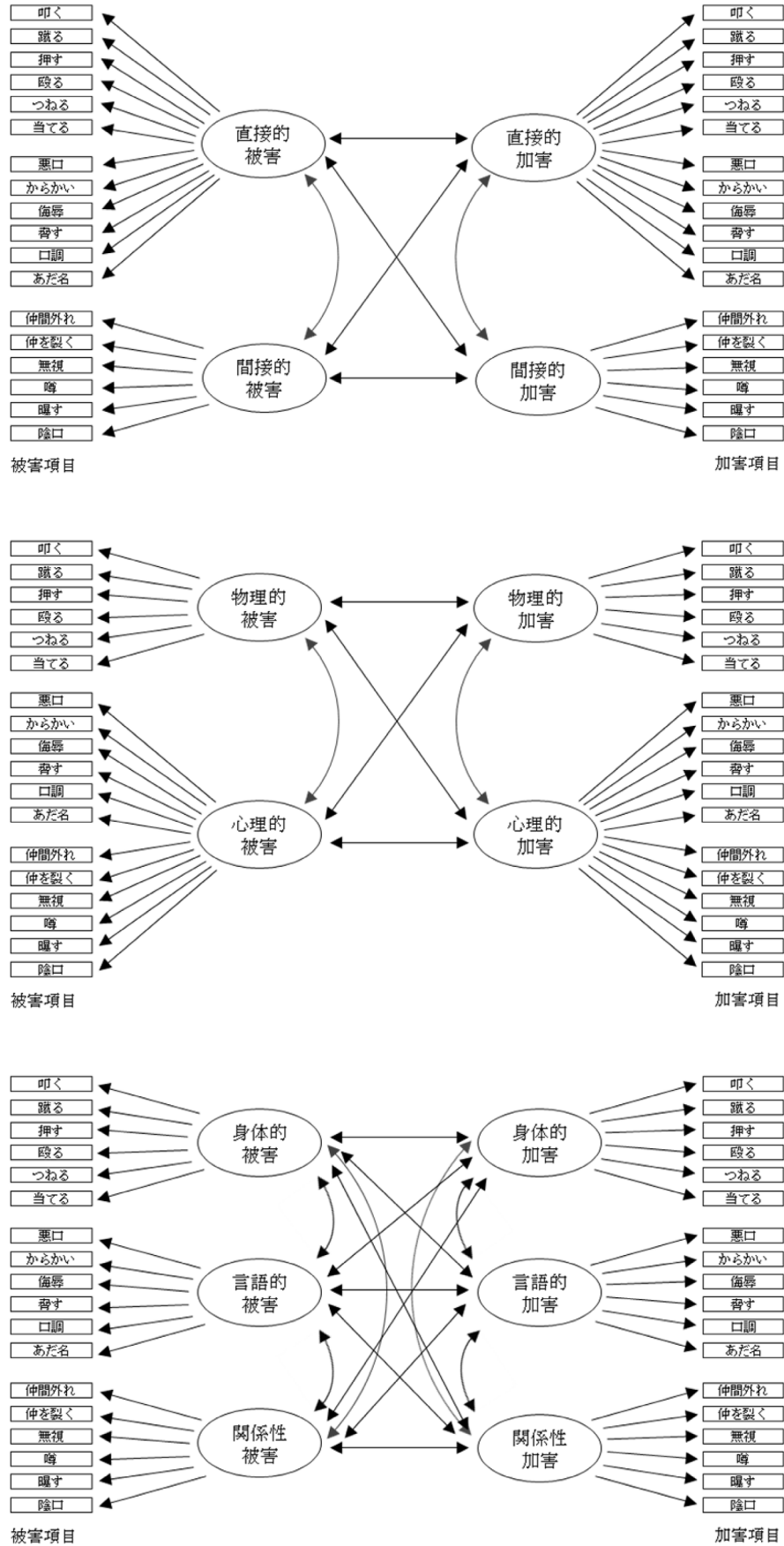


図1 いじめ被害と加害の検証的因子分析モデル

上段は直接的／間接的2因子モデル，中段は物理的／心理的2因子モデル，下段は身体的／言語的／関係性3因子モデルの図示化である。

表2 各モデルの適合度

形態のモデル	χ^2	df	p	CFI	TLI	RMSEA	90%CI	SRMR	PCFI
各1因子	3489.50	627	< .001	.895	.894	.102	[.098, .105]	.095	.891
直接的 / 間接的2因子	2994.69	620	< .001	.913	.911	.093	[.090, .096]	.083	.899
物理的 / 心理的2因子	2326.53	620	< .001	.937	.936	.079	[.076, .082]	.063	.922
身体的 / 言語的 / 関係性3因子	1976.32	609	< .001	.950	.948	.071	[.068, .075]	.056	.918

表3 3因子モデルの推定値

	推定値	95%信頼区間		標準化 推定値		推定値	95%信頼区間		標準化 推定値
		下限	上限				下限	上限	
被害の潜在変数から観測変数へのパス					加害の潜在変数から観測変数へのパス				
身体的被害					身体的加害				
v17. 叩く	1.00	1.00	1.00	.94	b17. 叩く	1.00	1.00	1.00	.94
v04. 蹴る	.96	.93	1.00	.91	b04. 蹴る	.97	.94	1.00	.92
v06. 押す	.98	.95	1.01	.93	b06. 押す	.98	.96	1.01	.93
v08. 殴る	.98	.95	1.02	.93	b08. 殴る	1.01	.98	1.04	.95
v11. つねる	.99	.95	1.03	.93	b11. つねる	.93	.89	.97	.89
v14. 当てる	.99	.95	1.02	.93	b14. 当てる	.99	.95	1.02	.93
言語的被害					言語的加害				
v07. 悪口	1.00	1.00	1.00	.85	b07. 悪口	1.00	1.00	1.00	.87
v16. からかい	.95	.90	1.00	.80	b16. からかい	.92	.87	.97	.80
v12. 侮辱	1.03	.98	1.08	.87	b12. 侮辱	1.00	.95	1.05	.87
v09. 脅す	1.05	1.00	1.09	.89	b09. 脅す	1.06	1.01	1.10	.91
v01. 口調	.98	.94	1.02	.83	b01. 口調	.95	.91	1.00	.83
v05. あだ名	.90	.85	.95	.76	b05. あだ名	.93	.87	.98	.81
関係性被害					関係性加害				
v13. 仲間外れ	1.00	1.00	1.00	.87	b13. 仲間外れ	1.00	1.00	1.00	.79
v15. 仲を裂く	.92	.87	.98	.80	b15. 仲を裂く	1.09	1.02	1.16	.86
v02. 無視	.99	.95	1.03	.86	b02. 無視	1.03	.96	1.09	.81
v10. 噂	.98	.93	1.03	.85	b10. 噂	1.14	1.06	1.23	.90
v03. 曝す	.94	.88	.99	.81	b03. 曝す	1.07	1.00	1.14	.85
v18. 陰口	.96	.90	1.01	.83	b18. 陰口	1.01	.95	1.08	.80
潜在変数間の双方向パス					女性ダミー変数から潜在変数へのパス				
身体的被害					身体的被害				
言語的被害	.65	.60	.70	.83	身体的被害	-.98	-1.19	-.77	-.46
関係性被害	.54	.48	.60	.67	言語的被害	-.34	-.52	-.17	-.20
身体的加害	.62	.56	.68	.72	関係性被害	-.02	-.20	.16	-.01
言語的加害	.51	.45	.58	.65	身体的加害	-1.09	-1.30	-.87	-.50
関係性加害	.43	.37	.49	.59	言語的加害	-.77	-.95	-.59	-.41
言語的被害					関係性加害				
関係性被害	.66	.61	.71	.90	関係性加害	-.26	-.42	-.10	-.16
身体的加害	.41	.34	.48	.52					
言語的加害	.46	.40	.52	.64					
関係性加害	.39	.33	.45	.59					
関係性被害									
身体的加害	.38	.31	.46	.47					
言語的加害	.45	.39	.51	.61					
関係性加害	.45	.40	.50	.66					
身体的加害									
言語的加害	.65	.60	.70	.83					
関係性加害	.54	.48	.59	.74					
言語的加害									
関係性加害	.60	.55	.65	.91					

v01 - v18 はいじめ被害項目, b01 - b18 はいじめ加害項目である。

表4 尺度得点の記述統計量

下位尺度	全体				男性				女性			
	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度
身体的被害	0.85	1.19	1.62	2.22	1.48	1.39	0.79	-0.22	0.44	0.81	2.75	10.20
言語的被害	1.71	1.36	0.72	0.03	2.00	1.40	0.52	-0.32	1.53	1.29	0.86	0.40
関係性被害	1.71	1.38	0.65	-0.26	1.70	1.36	0.63	-0.36	1.72	1.39	0.67	-0.23
身体的加害	0.78	1.14	1.55	1.66	1.44	1.36	0.70	-0.51	0.36	0.69	2.31	5.25
言語的加害	1.49	1.30	0.83	0.09	2.12	1.40	0.28	-0.58	1.07	1.05	1.19	1.42
関係性加害	1.37	1.17	0.88	0.43	1.57	1.16	0.56	-0.44	1.23	1.16	1.12	1.27

全体： $N = 443$ 、男性： $N = 175$ 、女性： $N = 268$

考察

本研究では、第1の目的は回顧的ないじめ経験の因子構造を明らかにすることであった。第2の目的は回顧法でのいじめ被害と加害との相関、いじめ経験の性差を検討することであった。これらはいじめ経験尺度の構成概念妥当性を確認することも含む。

基礎データの検討

まず、本研究の主要な結果の考察に入るまえに、基礎データを検討する。回顧法ではない先行研究(Ando et al., 2005)と同様に、大学生を調査対象とした回顧法であっても全般的にいじめ被害や加害の経験が少ない場合に高い頻度であることを歪度から確認できる。

因子構造

検証的因子分析によりモデルの比較の結果、適合度の観点から考えれば、直接的／間接的2因子モデル、物理的／心理的2因子モデル、身体的／言語的／関係性3因子モデルのいずれからも検討でき、どのモデルも採用できる。また、先行研究ではどのモデルも問題で述べたように分類の基準が明確であり、異なった分類でいじめを捉えることができる。その意味で、それぞれのモデルに因子的妥当性があると言えるだろう。こういった場合、何か1つのモデルを選択するとすれば、多角的に解釈できるモデルを選択するとよいと筆者らは考えている。そこで、2種類の2因子モデルの視点からも解釈でき(詳細は結果を参照)、因子構造の異なる先行研究の知見を幅広く利用できることから、本研究では3因子モデルを採用した。このとき、このような理由で3因子モデルを採用してよいのかという指摘もあろう。本論文では、実在論的な因子を想定した観点からではなく、いじめの具体的行為にはどのような潜在変数を想定すれば、概念的に有用な分析ができるかという観点

から因子を捉えている。そのため、3因子構造のモデルを選択することは問題ないと考えられる。

ここで本研究の3因子モデルの役割は、いじめ被害と加害において身体的、言語的、関係性いじめの3次元で把握できることである。役割はこれだけではない。言語的いじめは関係性いじめとの相関、身体的いじめとの相関が高い。このことは、回顧法か否かに関わりなく、日本において因子分析で抽出されていた(荒木, 2005; 本間, 2003)身体・物理的、心理的いじめで解釈できることを示唆している。また、回顧法ではないものの、海外において因子分析で抽出されていた(Björkqvist et al., 1992; Crick & Grotpeter, 1995; Lagerspetz et al., 1988)直接的、間接的いじめで解釈できることも示唆する。この両方から解釈ができるのは、言語的いじめを心理的いじめや直接的いじめに分類せず、身体的いじめと関係性いじめの両方の次元と相関の高い異なる次元として言語的いじめを位置づけられるからである。

また、Ando et al. (2005)の結果では、言語的いじめは被害と加害ともに、身体的いじめとの相関が間接的いじめとの相関よりも高い。本研究ではこの2つの相関にほぼ違いは見られない点において相違がある。これに対して、この2つの相関がほぼ同じ程度であった高橋他(2009)の攻撃研究は本研究と整合的であった。そのため、言語的いじめの形態に関する位置づけはさらに検討せねばならない。

被害と加害との相関

いじめ被害と加害との関連については、日本の中学生を対象としたAndo et al. (2005)の研究によっても示されているが、本研究の結果での回顧法においても同様に確認された。しかし、被害と加害との相関で同じ領域のうち関係性の領域では、本研究の相関は.66(尺度得点間の相関係数では.56)であり、彼女らの研究の相関は.28である。彼女らの研究では関係性いじめに関わる被害と加害との相関は同じ領域

の中でも低い。身体的や言語的いじめと比較して関係性いじめは集団構造と関わるからだと考えられる。本研究の方法では中学生だった頃（多くは3年間）の経験を尋ねていることに対して、彼女らの方法では本研究の方法よりも短期間（6カ月）での経験を尋ねている。短期間では集団構造の変化はあまり進まないため、同じ関係性いじめの形態を用いた報復がすぐに生じにくい、あるいは攻撃性の高い集団にいる場合でも同じ関係性いじめに関する被害と加害の役割がすぐに交替しないから、彼女らの研究では関係性いじめに関する被害と加害との相関が相対的に低いと考えられる。本研究のように3年間を通して経験があるか否かを尋ねた場合には、集団構造の変化が進んでいる可能性もあり（集団構造の変化に関する要因のうちクラス替えもあるだろう）、同じ関係性の攻撃やいじめの機会が増えて、関係性いじめに関する被害と加害との相関が高くなっているとも考えられる。

性差

いじめの形態別に経験の性差を見ると、身体的被害・加害、言語的被害・加害、関係性加害において女性よりも男性でいじめ経験を回顧的に報告する者が多かった。関係性被害に関しては性差は見られなかった。先行研究（Card et al., 2008; 国立教育政策研究所, 2016）では、関係性いじめ・攻撃に関しては男性よりも女性で多い研究もあるが、あまり性差が見られない研究もあり、身体的いじめ・攻撃に関しては女性よりも男性が多い。そのため、本研究の結果は回顧法であってもこれまでの知見といくらか整合している。

今後の課題

本研究では、いじめ形態の因子構造としては、身体的、言語的、関係性モデルが他の2因子モデルによる解釈を包括的にできる意味でも有用であることを論じた。また、いじめ被害内といじめ加害内の形態間に相関があるという点、いじめ被害がいじめ加害と相関する点、いじめ経験の性差が形態によって異なる点について、回顧法がどうかに関わらず、先行研究と整合性があることを示している。したがって、本研究のいじめ経験尺度の構成概念妥当性が以上から確認されていると言えよう。

今後の課題としては、第1に発達の要因を検討する必要がある。本研究における尺度の利用範囲とし

て、調査対象者が大学生に限定され、回顧法で中学生の頃を想起した場合に限定される。小学生、中学生、高校生が各時点でいじめ経験を評定するといった利用場面での信頼性、妥当性は検証されていない。回顧法によって確認された因子構造が、児童期や青年前期などの子どもを対象としたいじめ経験に関する評定での因子構造と不変であるなら、本研究の尺度の利用範囲が広がると考えられる。そのため、今後は各発達段階において各時点で測定するいじめ経験の因子構造の検証も必要であろう。

第2に文化的背景も検討する必要がある。研究対象の相違、測定法の相違によることも考えられ明確に言えないものの、海外では直接的いじめが見出されることから（Björkqvist et al., 1992; Crick & Grotpeter, 1995; Lagerspetz et al., 1988）、言語的いじめは身体的いじめと関連が、日本では心理的いじめが見出されることから（荒木, 2005; 本間, 2003）、言語的いじめは関係性いじめとの関連があると推察できる。文化によって因子間の相関構造が異なることが考えられる。しかし、同じ日本でもAndo et al. (2005)の結果は海外での結果に近似している。本研究では、言語的いじめは身体的いじめにも関係性いじめにも相関が高く、どちらもいえない。そのため、文化差に関して判断を下すにはデータの蓄積を待つ必要があるだろう。

第3に測定法による相違も検討する必要がある。本研究では「苦痛をあたえた」や、「苦痛をうけた」といった文言を項目に含めて回顧法を利用したが、これらを含めていない回顧法ではない隣接する攻撃研究（高橋他, 2009）でも、因子間の相関構造が同様の結果であった。このように測定法による相違があっても因子間の相関構造が共通している。しかし、「苦痛をあたえる」を含めず回顧法を利用していない点において同じ測定法であったAndo et al. (2005)と高橋他(2009)の因子間の相関構造は共通していない。他に方法的に異なる点として、選択された項目に相違がある。項目内容によって因子間の相関構造が異なることも考えられ、この点を明らかにすることも今後の課題であろう。

このように、発達の、文化的、測定的側面によって因子構造が相違する可能性がある。そのため、今後も尺度の構成概念妥当性を様々な側面から確認する必要がある。さらには、いじめ問題に寄与するためにも、短期的にも長期的にもいじめのどの形態によって影響があるかについて、因子的妥当性を含む

構成概念妥当性を伴った尺度を整えつつ検討するとよいだろう。

引用文献

- Ando, M., Asakura, T., & Simons-Morton, B. (2005). Psychosocial influences on physical, verbal, and indirect bullying among Japanese early adolescents. *The Journal of Early Adolescence*, 25, 268-297.
- 荒木 剛 (2005). いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンス (resilience) に寄与する要因について パーソナリティ研究, 14, 54-68.
- Archer, J., & Coyne, S. M. (2005). An integrated review of indirect, relational, and social aggression. *Personality and Social Psychology Review*, 9, 212-230.
- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.
- Betts, L. R., Houston, J. E., & Steer, O. L. (2015). Development of the multidimensional peer victimization scale-revised (MPVS-R) and the multidimensional peer bullying scale (MPVS-RB). *The Journal of Genetic Psychology*, 176, 93-109.
- Björkqvist, K., Lagerspetz, K. M., & Kaukiainen, A. (1992). Do girls manipulate and boys fight? Developmental trends in regard to direct and indirect aggression. *Aggressive Behavior*, 18, 117-127.
- Boulton, M. J. (2013). Associations between adults' recalled childhood bullying victimization, current social anxiety, coping, and self-blame: Evidence for moderation and indirect effects. *Anxiety, Stress & Coping*, 26, 270-292.
- Cañas, E., Estévez, E., Martínez-Monteaudo, M. C., & Delgado, B. (2020). Emotional adjustment in victims and perpetrators of cyberbullying and traditional bullying. *Social Psychology of Education*, 23, 917-942.
- Card, N. A., Stucky, B. D., Sawalani, G. M., & Little, T. D. (2008). Direct and indirect aggression during childhood and adolescence: A meta-analytic review of gender differences, intercorrelations, and relations to maladjustment. *Child Development*, 79, 1185-1229.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.
- 本間友巳 (2003). 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学研究, 51, 390-400.
- 星野崇宏・岡田謙介・前田忠彦 (2005). 構造方程式モデリングにおける適合度指標とモデル改善について—展望とシミュレーション研究による新たな知見— 行動計量学, 32, 209-235.
- 狩野 裕 (2002). 構造方程式モデリングは、因子分析、分散分析、パス解析のすべてにとって代わるのか? 行動計量学, 29, 138-159.
- 国立教育政策研究所 (2016). いじめ追跡調査2013-2015—いじめQ & A— Retrieved from http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/2806sien/tsuseki2013-2015_3.pdf (2017年3月25日)
- 黒川雅幸 (2010a). 中学生の電子いじめ加害行動に関する研究 福岡教育大学紀要第4分冊 (教職科編), 59, 11-21.
- 黒川雅幸 (2010b). いじめ被害とストレス反応, 仲間関係, 学校適応感との関連—電子いじめ被害も含めた検討— カウンセリング研究, 43, 171-181.
- Lagerspetz, K. M. J., Björkqvist, K., & Peltonen, T. (1988). Is indirect aggression typical of females? Gender differences in aggressiveness in 11-to 12-year-old children. *Aggressive Behavior*, 14, 403-414.
- Mehari, K. R., & Farrell, A. D. (2018). Where does cyberbullying fit? A comparison of competing models of adolescent aggression. *Psychology of Violence*, 8, 31-42.
- 水谷聡秀・雨宮俊彦 (2015). 小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情とWell-Beingに与える影響 教育心理学研究, 63, 102-110.
- 望月正哉・吉澤英里・武田美亜・瀧澤 純・黒川雅幸・吉澤和真・三島浩路 (2020). コミュニケーションに潜むいじめのリスク 教育心理学年報, 59, 265-273.
- 文部科学省 (2012). 平成23年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/___icsFiles/afieldfile/2012/09/11/1325751_01.pdf (2012年12月10日)
- 文部科学省 (2017). 平成27年度「児童生徒の問題

- 行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(確定値)について Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/02/_icsFiles/afieldfile/2017/02/28/1382696_001_1.pdf (2017年8月21日)
- 森田洋司・清永賢二 (1986). いじめ—教室の病い 金子書房
- 室橋弘人 (2014). 適合度指標 豊田秀樹 (編) 分散構造分析 [R編]—構造方程式モデリング— (pp.187-195) 東京図書
- 岡安孝弘・高山 巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- Olweus, D. (1993). *Bullying at school: What we know and what we can do*. Wiley-Blackwell. (松井賚夫・角山 剛・都築幸恵 (訳) (1995). いじめ こうすれば防げる—ノルウェーにおける成功例 川島書店)
- Olweus, D. (2012). Cyberbullying: An overrated phenomenon? *European Journal of Developmental Psychology*, 9, 520-538.
- Schäfer, M., Korn, S., Smith, P. K., Hunter, S. C., Mora-Merchán, J. A., Singer, M. M., & van der Meulen, K. (2004). Lonely in the crowd: Recollections of bullying. *British Journal of Developmental Psychology*, 22, 379-394.
- Solberg, M. E., & Olweus, D. (2003). Prevalence estimation of school bullying with the Olweus Bully/Victim Questionnaire. *Aggressive Behavior*, 29, 239-268.
- 高橋 史・佐藤 寛・野口美幸・永作 稔・嶋田洋徳 (2009). 中学生用攻撃行動尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 行動療法研究, 35, 53-66.
- 内海しよか (2010). 中学生のネットいじめ, いじめられ体験—親の統制に対する子どもの認知, および関係性攻撃との関連— 教育心理学研究, 58, 12-22.

付録 いじめ被害と加害の項目

項目略称	いじめ被害の項目文 (v01~v19)	いじめ加害の項目文 (b01~b19)
A. 身体的いじめ		
17. 叩く	たたかれて苦痛をうけた	たたいて苦痛をあたえた
04. 蹴る	けられて苦痛をうけた	けって苦痛をあたえた
06. 押す	からだを押されて苦痛をうけた	からだを押して苦痛をあたえた
08. 殴る	なぐられて苦痛をうけた	なぐって苦痛をあたえた
11. つねる	つねられて苦痛をうけた	つねって苦痛をあたえた
14. 当てる	自分にものをぶつけられて苦痛をうけた	相手にものをぶつけて苦痛をあたえた
B. 言語的いじめ		
07. 悪口	直接, 悪口を言われて苦痛をうけた	直接, 悪口を言って苦痛をあたえた
16. からかい	言葉でからかわれて苦痛をうけた	言葉でからかって苦痛をあたえた
12. 侮蔑	「バカ」や「死ね」などと, ののしられて苦痛をうけた	「バカ」や「死ね」などと, ののしって苦痛をあたえた
09. 脅す	言葉でおどされて苦痛をうけた	言葉でおどして苦痛をあたえた
01. 口調	ばかにされた口調で言われて苦痛をうけた	ばかにした口調で言って苦痛をあたえた
05. あだ名	いやなあだ名でよばれて苦痛をうけた	いやなあだ名でよんで苦痛をあたえた
C. 関係性いじめ		
13. 仲間外れ	仲間はずれにされて苦痛をうけた	仲間はずれにして苦痛をあたえた
15. 仲を裂く	人との仲をさかれて苦痛をうけた	人との仲をさいて苦痛をあたえた
02. 無視	無視されて苦痛をうけた	無視して苦痛をあたえた
10. 噂	悪いうわさを広められて苦痛をうけた	悪いうわさを広めて苦痛をあたえた
03. 曝す	隠したいことをさらされて苦痛をうけた	隠したいことをさらして苦痛をあたえた
18. 陰口	かげ口を言われて苦痛をうけた	かげ口を言って苦痛をあたえた
19. その他	その他にいやなことをされたり, 言われたりして苦痛をうけた	その他にいやなことをしたり, 言ったりして苦痛をあたえた

項目略称の番号は項目順を表している。